研究ノート

ロックフェラー財団の業績を顧みて

——人類の福祉を目指して五十年——

菅　支那子

昨年の夏八月、一週間をロンドンで過ごしたが、私には一刻千金とも感じられるそのうちの一日を、チャーリング・クロッスにある世界一大きな本屋、フォイルスのあちこちの部門で、ランチもそこそこに終日過ごしたことが、今では楽しい思い出の一場面となっている。フォイルスには十年前に来ているので、今回は二度目である。勿論、そこで見出した数多くの本の中には、今後ますます私の時間とエネルギーを奪うであろう本も何冊かあるが、ここに紹介しようとする「人類の福祉を目指して五十年」(註)と題された、ロックフェラー財団の業績史は、その日、私が何しとてもそのまま通り過ぎることの出来ぬ本の一冊であった。二百何十頁に及ぶ超大版の本で、豊富に挿入された写真も、それぞれ内容を説明して余すところがない。その本が手元にとどけられて以来、いつも自分の身辺に置いて、時折、開いて来てはいる。しかし全世界に散らばる、人類の福祉を目指しての、一九六三年で丁度半世紀に達した、世界最大の私設財団の活動は、余りに複雑多岐にわたっており、その規模は至って厖大なので、私の知識、経験の範囲を遙かに越え、理解も困難であることは否定出来ない。その上、客観的事実のみによって、事業の解説がこころみられているので、所謂、興味半分で読破しおおせる類の本ではない。しかし、何につけても財力少なく、貧困の故に苦しむ私ども日本人も、財力というものがかくも有効に、真面目に、工夫に工夫を重ねて用いられ得ること、その結果、一定の財力より幾倍もの福祉を、人類の上に齎すことも出来る劇的事実から、私どもは多くの教訓を読み取るべきではなかろうか。何れにしろ、財団の誠意と実行力には、驚歎以外に言葉なく、私を引きつけてやまぬものがあったので、最後までその業績を追跡した。ただし、紙数に限りがあるので、その概要だけを見て行くことになる。

財団の事業のすすめ方は、先ず、評議員会、役員会、現場職員などによって、いろいろな申し出が賢明に調査研究されてから、多くは教育、研究機関などに補助がなされる。財団に属する職員や研究員たちも様々の研究計画を着々ものにして行っている。また、将来ある個人に対しては、専門家としての能力を延ばすための研究費が、惜気なく提供されている。

この財団の最初にして最大の企画は、何といっても医学、公衆衛生

に関するものであったが、後には、社会科学、人文科学方面の企て、農業と関連ある諸科学畑のものがつけ加えられた。財団経費の大半は米合衆国内で費されているが、その計画は最初から全世界を舞台としたものであった。必要と成算の見込みがはっきりしていれば、たとえ他国の企てであっても、決してためらわずに、その求めに応じている。柔軟性の原則と激変する社会の必要に忠実に、五十年という期間に、目まぐるしい程に豊かな企てが展開されている。医学や公衆衛生方面の初期の活動は、その後、政府や国際機関が次第にひき継いで行くので、財団は研究方面と医学教育に一層、深く突っ込んで行ったといえる。同様に、生化学、生物理学、物理学、数学並びに関連科学を支持する財団の財源が増大するにつれ、自然科学方面に対する活動も、新しい行路をたどるようになる。農業が財団の計画に加えられたのは、人口爆発問題に直面して、食糧補給が重要になったためであった。この種の活動は今日では、全く世界的規模のものとなり、財団は南米、アジア、アフリカの食糧生産拡充計画に協力しているわけである。

この外、財団は過去二〇年の間に、人文並びに社会科学方面の計画を更に、展開することに努力して来た。これらの諸科学の価値は、公的生活と個々の人間存在の両方の質を高めるために、ますますその必要が認められるようになったからである。経済学、歴史学、言語学、政治学並びに創造的、演劇的方面の芸術はいずれも財団の援助を受けている。最近では、開発途上にある国々の莫大な必要を考慮して、主に教育的・科学的機関を前進させるための援助により、財団の計画はアフリカ、アジア、南米の地域を舞台に、大幅に拡大されるようになった。

この超大版の記念出版物につき、もう少し詳しく紹介しよう。「慈善の施し方」と題された最初の章では、この財団の哲学ともいうべきものが述べられている。財団の目的は、人間の進歩を奨励し、刺激するにある。その目的の実現は、一にも二にも、その資金を賢明に分配することにかかっている。この財団は組織された社会事業をその特色とするが、慈善を施すとは、また、個人的、集団的な意味で、人間の福祉をはかることであるならば、それは親しく、人間存在全体に関係する事業だというべきである。慈善の行為は、技術と科学の両方を含む、複雑な過程と考えられるので、当然、それは創造的になされねばならない。ロックフェラー財団は世界をその活動領域とする僅かな財団の一つであるが、この財団独自の創造的責任はまた、社会的であり、教育的である。半世紀前、老J・D・ロックフェラーがこの財団を始めた時、「諸悪の原因を探求し、その根源にさかのぼって、それを除くことに専心するために慈善を行なう、一種の信托（トラスト）である」と考え、主として身体上の条件を改善しようと努力した。しかし、初期の目的の多くが達成され、或いは公共機関がそれを引き継ぐにつれて、その活動領域は更に広まり、機会が増して来た今日では、その目的は専ら、改善と啓発にあるといえよう。慈善の功徳を評価することはむずかしいが、ロックフェラーが生きていれば、以上に述べた言葉を再強調することであろう。多くの富豪といわれる人々を研究して、彼はいっている。「彼らが出費した費用に対して、それに相当する、真の結果を生み出し得る道は唯一つである。それは金が永久的満足をうみ出すと思

われる時に、金を出す趣味を養うにある」と。半世紀後の一九六〇年、国務長官となるため、財団理事長の職を辞したディーン・ラスクは、丁度同じような意味のことをいっている。「財団が用いる金は、自由にまかされている財源を用いて、一人の人間がなすよりも遙かに多くのことをなそうと、懸命になっている人々が、信託されているという気持と精神で、用いるべきものだ」と。

近代の財団は元来、二〇世紀アメリカの産物であるが、慈善という概念は歴史の根底深くに横っている。プラトンのアカデミーに溯ってそれを見出すことが出来る。アカデミーは殆んど九世紀にわたり、世代から世代へと伝えられ、永久的基金ともいうべきもので支えられていた。この概念はまた、エジプトでマケドニア王朝を創始し、アレキサンドリアの図書館に永久的財源を寄附したプトレミー一世、二世たちや、ハドリアンを含む多くのローマ皇帝にも溯ることが出来る。彼らはその統治期間中、いろいろと慈善事業施設を設立したのである。中世期の修道院には、財団が持つ特長の一面があったし、テューダー王朝以後、引き続き発展した、英国の慈善とか慈善団体の概念は、近代における財団に理論的根拠を提供しているといえる。十四世紀にまで溯ると、裕福な英国商人たちは、「悩める者を救い」、「学者を扶養し」、娘たちに「持参金を与える」とか、「彼らを修道女にすることに大金を用意して、その罪をぬぐい取るよう」ウィリアム・ラングランドに勧められている。エリザベス女王時代の十七世紀初めになると、金銭の慈善的使用に関する法規を定めて、その法的体制をつくり上げている。英国その他の国々で見られるように、十九世紀までには政治上の改革は人間困苦の根源にまで触れ、その救済策を立法化し、指図し始めるようになった。それにつれて、慈善は今までよりも広い視野と展望を持つようになり、今日、私どもが知っている財団の直接の先駆は、当時の裕福な人々によって樹立されるのである。

ベンジャミン・フランクリンは多くの分野で先鞭をつけているが、最初に、非宗教的財団を創設した人でもあった。一七九〇年、ボストン市とフィラデルフィア市にそれぞれ一千ポンドを残し、その利子を「実直な既婚の徒弟」に貸与するようにさせた。十九世紀前半には、孤児、移民、その他の人々を助けるため、多くの基金が設置されるようになった。例えば、一八三一年、商人、ステフェン・ジラルドは彼の死に際して、フィラデルフィア孤児学校に二百万弗を基金として寄附している。しかし当時は比較的少数の富豪しかいなかったため、この種の寄附はなお、珍しいことであった。有名なバルティモーア市の商人が一八六七年、その全財産を捧げたために、ジョンス・ホプキンス大学はその設立を許可されるが、その同じ年に、最初の近代的財団と呼ばれるべき、教育基金がバルティモーアのもう一人の有名な商人で、銀行家のジョージ・ピーボディによって設立された。彼は二百万弗にのぼる彼の最初の贈与金は、南部における南北戦争（一八六一―五年）による荒廃を回復することを目的として、無制限に用いるべきだと規定した。四八年間存続したこのピーボディ基金は、特に黒人の間で最も重要な活動をなしたとされている。

十九世紀のアメリカでは、最近二〇年間は除き、以上にあげた財団を含めて、七つが設立されており、その僅かなものが今でも特に最大

で、最も力あるものだといえよう。その中にはカーネギー・コーポレーション、カンマンウエルス基金、ジョン・サイモン・ガゲンハイム基金並びにロックフェラー財団をあげることが出来る。そしてこれらの財団に共通に適応される歴史的種子は、産業革命の唯中でまかれたといわれている。十九世紀が終わりに近づくにつれ、科学上の発明に刺激されたことも手伝って、今日では到底、許されないような条件下で、企業、事業は拡張の一途をたどり、厖大な富が積み上げられることになる。ところが、富がこのように積み重ねられると、思慮深い何人かの富豪たちは、良心との一致とでもいうべきものを感ずるようになった。それを最初に呼びさましたのは、アンドゥリュー・カーネギーであった。彼は「富」と題する一八八九年に発表した有名な論文中で、こう書いている。「一人の人間が、手にし得る何百万弗の富を、しかも彼の生存中に思うが儘に処分し得るその富を、後に残して死んで行ったとしても、誰一人彼の死を嘆かず、敬意を払わず、讃歌も捧げてくれないような時が、そのうちやって来る」。このカーネギー哲学と彼の心のどん底からの叫びに大いに感動して、ロックフェラーは「貴下が貴下の富を用いてしていられると同じことを、もっと多くの富豪がやればよいのに」と、鋼鉄王に書いているが、その時、彼は既に石油で獲得した富を、価値ある目的のために分配する方法を考慮中であった。しかし未だ出鱈目に、求められるがままに与えるという方法をとっていた。彼の富ははっきりと価値ある事柄を強化するために用いるべきだ、と本能的に感じてはいたが、それを如何すればよいかとの結論には、達していなかった。

その頃、テオドラ・ルーズベルト大統領は富の分配に関する法令を立法化したが、それよりずっと以前から、ロックフェラーはシカゴ大学、その他の教育機関に巨額の寄附をして、既に真剣に財団をつくることを考究し始めていた。二〇年間、その会長をつとめ、後にその歴史を書いたレーモンド・フォスディックは、「ロックフェラー財団物語」の中で、ロックフェラーと彼の仲間たちの努力について、丹念に述べている。彼の報告によれば、既に一九〇九年、ロックフェラーがいうには、「子孫が如何程善良でも、無経験な者に財産は托されない。他人のために用いる金銭については、自分自身の家族が用いるために貯えて置くのと同じように、特に注意深く扱わねばならない」と。この立場から、熱心に探し求めた結果、当時、アメリカ長老派教育協会の事務長であったF・T・ゲーツが見出された。ゲーツはそれ以後、財団の先駆である、ロックフェラー医学研究所、特に、合衆国の南部で、性、人種、信仰に関係なく、教育方面で力を尽した一般教育部、南部諸州で十二指腸虫を根絶することに専心した公衆衛生委員会等を次々につくって、寄附に関する所謂、指導的天才として活躍した。そして科学的寄附の原則を導入、小間切れ寄附をやめて、殆ど全面的に大規模の慈善をするよう、説得することに成功した。ロックフェラーとゲーツ両人の普々ならぬ関係のことを、フォスディックは次のように説明している。

ロックフェラーの方はその思想と目的について無言、冷静、言葉を抑制する態度が如何にもストイック的であるのに反して、ゲーツの方は刺激されると、熱烈な雄弁で人を動かさずには置かなかった。もの

をいう段になると、ロックフェラーはゆっくりと控え目に、はっきりと徹するように、しかも声をあげず、身振りもしないで語った。ところがゲーツの方はその議論が圧倒的で、時には横暴と思える程であった。ロックフェラーは決して苛立たず、誰に対しても小言をいわぬ、この上なく忍耐深い人間であった。ゲーツ自身がロックフェラーについての印象を、このように述べている。「言葉使いは非常に丁寧、周到であったが、沈黙を守るにも細かく、狂いがなかった」。それに反して、熱烈な福音宣教者であったゲーツは、文字通りに卒直で包みかくしがなく、老ロックフェラーに対してどなるように、「あなたの富はなだれのように、どんどんたまって行きます！　この状態を続けねばならぬというのですか！　ふえるよりも早く、それを分配しなければなりません。さもないと、富はあなたを、子供たちを、孫たちを押しつぶしてしまうに違いありません！」と、いっていいる。

ゲーツのような人物の貢献によって、ロックフェラー財団の理念は作り上げられたのである。丁度、財団が設立されようとする頃、ロックフェラーの息子、ジョン・Dが場面に登場して来る。父親が彼のことを「人生における最大の財産」といっているように、この父子の関係は稀に見る純真な信頼と愛情が貫いていた。息子はその父が最も尊敬している素質、即ち誠実さ、疲れを知らぬ勤勉、実際に即した判断力、適当なものを不適当なものからふるいわける能力、などを持ち合わせていた。彼はブラウン大学を卒業すると、直ちに父の事務所に見習いとして務め、父と同様に、目立ない処で働きたいとの願いを持っていた。父と同じく、大きな慈善事業を指導するに足る人物を見出す問題と取り組んでいた。そして今や、二人のロックフェラーとゲーツは素晴らしい三人組となった。

このようにして、一九〇九年、ロックフェラーがニュージャージーのスタンダード・オイル七万二千株を信託証書で、息子のジョン・Dと義理の息子のH・マコーミック、そしてゲーツに与えた時、財団は事実上始まったということが出来る。勿論、ロックフェラー元来の意図は、米合衆国議会から法人の許可を得ることであった。それは不可能になったが、引き続きニューヨーク州から、何の抵抗もなしにその許可を得ることが出来た。そして、ここに改めて成立した財団のために、更に一億三千万弗近いものを、有価証券の形式で贈与した。「この資金をただ徒らに保持し続ける義務はない。自由に処分して頂いてよいし、もっと賢明と考えられる方法が見つかった時は、何時でもこの資金の形式を変えて結構です」という意味の手紙を添えて、理事会に寄附された。

一九二八年、いろいろなロックフェラー慈善事業委員会が、人知の進展に関する諸計画を一つの傘の下に、集める目的で再組織された時、財団は、自然科学、農業、人文科学、芸術に関する一般教育会の機能を、引き継ぐことにした。また、諸外国の広い教育分野で活動するためにと、ジョン・D二世が始めた国際教育委員会並びに老ロックフェラーが一九一八年、その妻を記念して作ったラウラ・スペルマン・ロックフェラー記念財団――これは主として社会福祉の分野で、そして後には社会科学の分野で活動した――この二つの方面の活動をも、引き受けることになった。このようにして、組織された時の財団の基本

金は、総額二億四千二百万弗に達したといわれる。そして財団設立五十年を経た今日、その額は殆んど六億四千三百万弗と見積られているが、この数字は、合衆国並びに財団の不断の成長をはっきりと示している。

この資金は、大体、三つの方面に分与されることになっている。即ち教育上・研究上の計画や施設発展のために、時にはそのための建物や設備を援助して教育的・科学的機関に、特別研究費や旅行費の補助として個人に、更には、財団職員の活動やその海外事務所維持のために用いられる。勿論、最後に述べた分は五十年間の金額でも、比較的僅かな八千一百万弗が費されているだけである。

国家や一般社会が教育上の責任を受け持ち、教育上の企てを始めるにつれ、財団初期の機能や活動の多くは、それを私設慈善事業が続ける必要を減じて来た。しかし財団が示した歴史的実例はなお、生きており、その解決方法は今も妥当である。ロックフェラー財団五十年間の記録は、現代人の必要をみたすための私設財団の役割を、はっきりと証明して十分である。先ず、私設財団は、率先することが出来る。開拓することが出来る。獲得し得る人知と人間の能力を鼓舞し、もの事の原因追究や実験の結果を、問題解決へと導くことが出来る。殊に、一つの政府が他の政府に関係したり、巻き込まれて行くと、政治的紛糾がかもし出され易い。ところが、私設財団はそれに捕われることなく、自由に行動することが出来る。そして国家的・政治的限界を越えて、協力活動を進めることが出来る。高い程度の個性と様々な見解を、人間をより善くする方向へと運ぶことが出来る。

今日の財団に対する挑戦とその事業は、私どもの文明にとって、生死に関する程大切であって、単なる学問上の事柄ではない。従って、財団が直面する問題は、年々複雑さを増すばかりである。今日は文字通りに、巨大な額の出費がなされる時代であり、その決定は多くの場合、政府の手でなされている。しかし、このような時代における問題解決の道は、財団にとって直接的であるのが望ましい。たとえ比較的少ない資金であっても、創造的に、想像力を以って用いられるならば、この世代の全雰囲気に影響することも出来よう。そして優秀な基準が保たれよう。公共の資金が容易に且つ賢明に導入されないような分野で、有望な学者や指導者の研究と生活を豊かにすることが出来よう。未だ輿論が成立していないような計画を支援し、その研究と証明によって、この激変する時代の緊張と困難の軽減緩和に役立ち得よう。これに関しては、政府は未だ十分に活動しているとはいえない。現代生活のますます複雑化する組織に適当な解決を見出す責任は、当然、学者が負うべきだと思われるが、そのような学者たちの活動が期待される芸術、人文科学、社会科学の分野については、以上に述べたことが特に、あてはまるといえよう。

財団が企て得る最善のことは、人々に希望を起こさせ、彼らを支援するのにその資金を用いることであるが、それは先ず個々人の側での努力に端を発しなければならぬ。人間的均衡とでもいうべきことが最も大切であって、それは与える人と同様、受ける人の両方に作用するものである。財団の運営にとって、資金は大切であるが、究極的に重要なのは、財団の中の、財団を取り巻く、人間の問題であり、彼ら

に与えられている自由であり、彼らがそれによって生きている哲学である。この点で、ロックフェラー財団は最初から好運に恵まれていた。財団の誕生以前にも以後にも、二人のロックフェラーとゲーツに加えて、多くの人々がその行程を決めるのに役立ち、いろいろな委員会の役員として、大切な仕事を果たして来た。その他多くの働き人たちは、知識とその普及が一般人類のために果たすことを、現場で実証することによって、財団の目的である慈善を地で行く生き方を達成するのに、はかり知れぬ程、貢献した。

そのような働き人の一人に、サイモン・フレスクナー博士があった。彼は行商人の息子として生まれ、ケンタッキー州、ルイスビルで鉛管敷設工として出発したが、後、薬屋で売子として働く間に、医学に興味を感ずるようになった。ルイスビル薬学校で二年の課程を終えてから、ジョンス・ホプキンス大学に進み、そこで彼の特別の能力は、W・H・ウェルチュ博士によって見出された。その時までに、フレクスナーは既にジョンス・ホプキンスとペンシルバニアの両大学で教えていたが、ウェルチュ博士の推薦によって、一九〇一年、ロックフェラー医学研究所の最初の所長となるのである。

ワレス・パトリック博士は一九一七年以降十年間、財団の理事となり、一般教育会が一九〇三年に始まって以来、二〇年間その長を務めた。ゲーツのように、彼も長老派の牧師であった。ニューヨーク州に生まれ、鉄道の制動手として人生を歩み出したが、後、ローチェスター神学校に入り、東部や中西部の教会で働いている。アメリカ長老派国内伝導協会を知ってからは、南部で黒人のために献身した。パトリックは大いなる仁慈の心とともに常識を合わせ持つ、実際的で、質朴な人間であった。「慈善事業の機能は、急な斜面を走る汽車を助ける、余計な機関車の働きだ」という、有名な言葉をつくり出して、財団の役割を指摘したのも彼であった。

ウィクリッフ・ローズ博士はフレクスナーにも増さる素晴らしい標語製造家で、公衆衛生と教育事業に大将のような熱情で尽瘁した。彼がつくった「優秀さの特長を打ち建てる」という言葉は、国の内外で傑出した機関となることに専心するよう、財団を指導した、大切な標語の一つであった。多年にわたり財団の理事であり、一般教育委員会の会長であった。彼はその仕事に対して一種、接衷的態度で臨んだため、理事会に対して完全に実際的で、組織だった計画を提出することが出来た。また、出来る限り自ら親しく学ぼうと、現場に出かけ、沈滞した個所をどんどん歩き廻っては奨励したので、遂には慈善事業界で独自の地位を占めるようになった。南北戦争中に南部で生まれ、郷里のテネシー州で教育を受け、ナッシュビルのピーボディ大学で哲学の教師をつとめる。そして四五才の時から、ピーボディ基金の仕事に従事した。このような管理職の経験と南部の諸問題を扱うのに適した広い背景を持っているという理由により、彼はロックフェラー衛生委員会委員長に任命され、南部諸州で十二指腸虫撲滅という重要な仕事を始めた。そして財団の庇護の下に、この仕事を続行することになるのである。ローズは論争能力を持つ、小さなブルドッグのような人間であった。無名を求める程に謙虚であったが、公衆衛生の分野では、世界的規模の視野を持ち合わせていた。そのため、後、海外の科学教

育領域にも、それを拡大することになるのである。

財団の指導的原理を築きあげた人々には、この外にも何人かあるが、特に七人の財団の会長――その中でもJ・D・ロックフェラー二世、R・B・フォスディック、ディーン・ラスク――は財団の政策と歴史に、それぞれ独特の貢献をしている。例えば、D・ラスクは早くも一九五五年、財団の計画を未開発国が必要とするものに向けるべきことを発表している。彼はいっている。「英語を話す民主主義の国々、西欧及び鉄のカーテンの外にある地域で何が起こりつつあるか、その歴史的意義を十分に知っていなければならぬ。民主主義的・国家主義的・経済的革命が西欧で起こる過程で生じた、理想や野望は、今や他の地域でも到る処で、爆発的に要求されているのを見る。今日の未開発国は、そのような理想や野望を借りて来て、もっと進んだ国々を手本として、眼前にそれを描いている。ところが、彼らには、資本と訓練された指導力、教育ある人々、政治的安定、変化が自国の文化によって如何消化され、用いられるべきかについての理解が欠けている」。この理論は主として国務長官ラスクの指導下に、外国援助計画として米合衆国政府が想像力を以って実現して来ているが、これはまた、未開発国における財団の現在の時点での活動を指導する原理でもある。この方面での大切な活動の一つに、アフリカやアジアの新興国家における大学援助があるのは周知の事実である。

以上、ロックフェラー財団の起源、組織、財団を推進した主な人々につき、その輪郭を述べたが、次に、過去五十年にわたる財団の活動につき、簡単に触れよう。先ず、人間の健康を求めての活動には多々あるが、十二指腸虫問題の根本にまで溯ってそれを撲滅したことがきっかけとなり、多くの人間の病気、死亡の原因がマラリヤであることを見極め、合衆国から一九四四年までにその病源であるアナフェルスと呼ばれる蚊を一掃することが出来た。そしてその恩恵を世界中のマラリヤ国、四五ケ国にまで及ぼすことが出来た。特に、蚊の撲滅にとって、DDT発明の効果は素晴らしいものであった。一九四五年、財団の専門家たちは連合軍の保護の下、イタリアでDDTの効果を実証したが、今日では六五ヵ国がその恩恵に浴しているといわれている。これこそ、非軍隊的分野における、史上最大の国際協力活動といえないだろうか。マラリヤの場合と同様、蚊の媒介による黄熱病との戦いがある。一九一五年に始まったこの戦いは、三〇年以上に及んだ。財団は多くの医者、科学者の才能や体力を集めて、この恐しい病気の根絶に尽したが、その途中、六人の犠牲者を出したのである。その中には、あの有名な世界的科学者、野口英世博士がある。彼は黄熱病の原因はスピロヘータであると考え、その微生物を分離して、免疫血清をつくったのがきっかけとなった。即ち彼の努力によって、黄熱病はビールスから起こされることがわかったのである。

このように、財団の伝染病研究並びに根絶運動は、全部で八十ケ国に及ぶといわれる。このことはやがてこの分野で働く人々を養成する必要を痛感させる結果になり、医学、公衆衛生、看護学を研究する学校が設立されるようになる。当時は未だ公衆衛生分野は専門職のそれとして認められておらず、看護婦の仕事も家事位に考えられていた。そこで、その必要に答えて、財団はエール大学に新しく看護学校を設

立するため、百万弗を寄附したが、今日では学士号とともに専門教育を受けた看護婦たちのための大学院レベルの教育機関として、世界中で最も優れたものの一つに成長している。

勿論、医学教育方面の財団の援助は米本国のみならず、英国の有名諸大学を始め、欧州、南米の各地にまで及んでいる。一九二九年、財団再組織の折、医学を除き、生物学を始め、あらゆる自然科学分野の研究を奨励することになる。例えば、戦後五年間に六十以上の欧州各国の研究所実験装置のため、援助の手をさし延べているという。その結果として、第一次と第二次大戦の間に、自然科学上の発見をすることになり、驚くべき原子時代をつくり出すことにもなるのである。そのように大切な発見をした自然科学者の多くは、次々に財団の特別研究員となり、研究補助を受けている。医学と自然科学分野だけでも、これまでに二九人がノーベル賞を受けている。そのうち、私どもに親しい名だけをあげると、二七年、物理学でA・H・コンプトンが、三八年、物理学でE・フェルミが、三九年、化学でL・ポーリングなどが受けている。これは自然科学分野ではないが、三〇人目にノーベル賞を受けた人は、黒人で、当時の国連事務副総長R・J・バンチがある。その理由は、平和という大目的のために多くを尽した廉でというのであった。このように大部分は自然科学の分野で最善の装置を提供し、それを用いることの出来る最善の人々を見つけて研究を奨励するという財団の機能は、以後は、他の団体や国々が果たすことになるかも知れない。兎に角、過ぐる数十年は科学的探求の黄金時代であり、その中で財団が果たした役割に対し、私どもは誇りを感ずるとともに、そのような素晴らしい機会が提供されたことに対し、財団は感謝すべきである。

公衆衛生や病気の原因排除に続いて、次に財団が取り組んだ問題は、世界中の人間に、如何にして食糧を供給するかということであった。この問題はいうまでもなく、農業や農学、人口問題と関係があり、ひいては未開発国を援助することに、財団が挙げてその努力を向けることにもなるのである。例によって、財団の農業計画はその範囲が世界的で、印度から南アメリカ、近東、東洋諸国にも及んでいる。殊に、最初の試みはメキシコ計画で、先ず穀類を貯える倉庫の改良に始まり、土壌の研究、そのための研究所の設立、要員の養成、農業専門家の提供、そして最後は、メキシコ人自らで運営出来るよう、その援助は徹底的だったといわねばならならぬ。例えば、先ず二千種以上のとうもろこしを調べ、そのうち収穫高が最善と思われるもの六種を選び、気候、海抜、土壌に応じてそれをメキシコ農民に分配するという行き方であった。同じことは、小麦に対しても試みられた。メキシコの人口は過去一八年間に約六〇パーセント増加しているが、小麦においては自給出来るようになり、とうもろこしの輸入も非常に少なくなった。やがて、その必要もなくなるだろうといわれている。

この小麦に対する研究計画は中近東方面にも大変な衝撃を与えていて、最近は、シリア、ヨルダン、エジプト、トルコ、イラク、イラン、アフガニスタン、キプロス、リビア、パキスタン等々は、財団の専門家やメキシコ人指導の下で、研究しているということである。同じような方法は、馬鈴薯や米に対しても講じられている。殊に米にたいし

ては、国際米研究所がマニラ近郊に設立され、タイ、日本、印度、フィリッピン、U・S・A、台湾の六カ国が素晴らしい国際協力の手本を演じているのである。土着民に農業技術を養成しようとの財団努力の劇的な例は、印度でも起こりつつある。一九五八年、ニューデリーに印度農業研究所という大学院レベルの機関が設けられて以来、財団は財政的に、また、助言者や客員教授を送って、援助を続けている。そして今や印度が主人役となって、東南アジアからの若い農学者を訓練しているのである。

これと同様に、アフリカの新興諸国による挑戦はロックフェラー財団にとって、多くの点で、途方もなく大きいものだといわねばならぬ。というのは、アフリカ人にとって、農業は新しい繁栄、新しい生活標準、新しい世界建設への鍵となり得るからである。アフリカでは南米と同様、慈善の代価は至って高く、あらゆる党派や団体の関心をかきたてるようになることを指摘して置きたい。しかもそれは農業援助の分野で、一番、はっきりしているのである。いう迄もなく、十分な食糧、善き栄養は普遍的に必要であり、所謂、党派を超えて、人間生存の必要条件だからである。

財団が力添えしたもう一つの分野は、社会科学、人文科学、芸術を含む思想の世界であった。世界各国の関係が困難になり、科学的自然と同じく、社会的宇宙における人間の地位が増々、複雑化し、芸術を味得鑑賞するとともに、創作する機会が増大するにつれて、財団はそれらの諸問題を一まとめにして、社会科学と人文科学の分野に追し出されることになった。既に見て来たように、財団の初期の活動は主として公衆衛生と医学教育に関するものであった。それがフォスディック会長の頃になって、人間の福祉に関心を持つならば、複雑で限りなく拡大する人間関係の問題解決に乗り出すべきだとして、慈善哲学を広範囲に実現することになり、この方面でも、財団は大きな貢献をした。ロックフェラー一世夫人を記念して出発したラウラ記念財団は、元来、社会奉仕、福祉財団として始められたが、B・ルムル同財団長は国内国外諸大学の社会科学者に、社会の勢力や状勢と、直接、接触して研究するよう奨励した。例えば、シカゴ大学の都市社会の研究に対して、ウイスコンシン大学の地代と土地所有に関する研究に対して、人間関係研究所設立のためにはエール大学に対して、ハーバード大学商業経営学校のE・メイヨー博士が行なった、温度や光が従業員に及ぼす心理的影響や能率度の研究に対して、それぞれ援助を惜しまなかったのである。海外においては、ロンドン経済・政治学校を初め、欧州大陸の多くの研究所にその援助を拡大した。また、国内ではニューヨーク社会事業学校、シカゴ大学管轄下にある同種の学校を初め、他の学校に多大な援助を与えた。それが効を奏したのであろう。これらの学校で教育された多くの男女は、あの二〇年代の不況の渦中にあって、中央政府の専門家として、社会事業に挺身したのである。更に、戦前戦後を通じて、国際関係の研究に対する財団の貢献にも、大きなものがあった。わけても、ロンドンにある王室国際事情研究所のF・ワルター博士には国際連盟史を書くために、また、同研究所のA・トインビー教授には四〇年代の国際関係史を書くための援助など、特筆すべきものであろう。理論と実践を結びつけた分野では、国際平和カ

ーネギー基金青年外交官養成の計画に賛成して、この財団がコロンビア大学、ジョンス・ホプキンス大学、或いはゼネバの国際問題研究所における研究を助けた額は二百万弗にものぼろうという。同じく国際的次元で、財団は多年にわたり、フルブライトやスミス・マウント法による教育分野での人事交流計画を扱うために、国際教育研究所を支援し続けている。六一年から六二年にかけての一年間だけでも、一万三千人のアメリカ市民を外国へ送り、四千人の学生と教師を外国から米国に迎えている。

また、人間の価値と人間関係を広く深く知り、且つ理解することは、人間の福祉全体を進展させるのに欠くことが出来ないと確信して、ロックフェラー財団は個々の学者の計画であれ、研究所の計画であれ、人文科学、社会科学方面の将来性ある試みを見つけては、それを支持している。殊に、財団自身が法哲学と政治哲学の計画を発意して、人間の根源的制度に関する独創的思想と研究を奨励し、そのため一〇年間に四〇冊以上の出版を手伝っている。

なお、人文研究に根源的なものは、古典世界への洞察だと考えられるが、財団の国際教育委員会は早くもローマにあるアメリカ・アカデミーやアテネにあるアメリカ古典研究学校に莫大な費用を投じて、古典的人文研究の促進に寄与している。その上、ジョン・D二世は個人としても、アテネのアゴラ発掘のために大いに支援している。キリスト紀元以前二千年にわたり、六エーカーに及ぶ土地を占めるこのアゴラは、アクロポリスの山麓にあり、古代アテネの市場であるとともに市民の集会所であった。それはまた、ペリクレスの古典的民主主義の時代に、ギリシャ人たちが政治の諸問題を討論する場所でもあった。一九三〇年代に、ギリシャの考古学協会やギリシャ政府と協力して、財団はこのアゴラから何千というかけた彫刻やランプ、陶器等を堀り出した。更に財団からの三〇万弗の寄附により、考古学者たちはそれらの発掘物を評価したり、かけらを復製したりした。そして古代の貴重な美術品を保存するため、耐火性のアゴラ博物館が建設された。今や、古典学の研究は単なる保存から解釈に移って来た。即ち人間経験の主な流れと今日の世界における人間自身との関係を理解し、それを古代世界と関係づけることに変って来たのである。

このようにして、過去五十年の間に、財団は既に述べた自然科学や医学方面を合わせると、九七人の男女のノーベル賞受領者を援助したが、その中には、既に挙げた一九五〇年の受領者、R・バンチ博士の外に、一九四八年のノーベル桂冠詩人であった、アメリカ生まれの英人、T・S・エリオットがいることを忘れることは出来ない。

一九三〇年代までの財団の人文科学に対する関心は、以上のように、人間とその関係についての知識や理解促進の努力を助けることであったが、更にそれをふまえて、創造的芸術を支持することに拡大して行った。最初の頃は、演劇部を創設、或いは強化する諸大学を助けたり、音楽、文学、劇などを創作する若い芸術家を奨励するための団体を援助していた。ところが、一九五二年以来、聴衆や観客、所謂芸術理解を広めるような活動に、援助が与えられるようになった。そして一層、広い範囲の人々が芸術を理解し、新しい芸術様式や新しい試みを始めるよう奨励して、作曲、舞踊、小説、劇、美術、その他何でも、優秀

な創作を助けるようになった。なお、序でながら、特筆すべきことは、言語研究と伝達の問題である。一九三〇年代の中頃までは、米国の外国語研究といえば、二、三の西ヨーロッパ語とギリシヤ、ラテン等の古典語に限られていた。しかし丁度その頃、財団がロシア語、中国語、日本語の研究に関心を示したことが、はからずも重要な意義を持つようになった。即ち財団は国の戦時緊急対策の前ぶれとして、徹底的な言語研究計画をたてることになり、それが種になって、第二次大戦中の陸軍兵のため、言語が加速度的に学習出来る技術が、考案される結果になった。そのようなコースを選んでいた数百の学生たちは、戦場で或いは戦場の近くで、通訳者や教師の役割を演ずるようになるのである。

更に、人文科学の分野で、世界の大図書館を保存するためになした財団の貢献を見のがすことは出来ない。オックスフォード大学のボドレイアン図書館は、一五九八年に建てられたもので、三世紀以上に及ぶ英国生活のすべての面に関する本や書類を納める、国家的宝庫として役立っている。同時に英国で出版される本は、凡て寄贈を受けている関係上、それらを納める場所の問題が起こった。財団はは委員会を組織して、欧州大陸、米国、カナダにおける有名図書館を調査させた結論として、ボドレイアンに二百三十万弗を与えて、五万冊を入れる新図書館が建てられることにしたのである。ちなみに、一九六五年の夏、私が偶々、オックスフォード大学にこの図書館を訪れた時は、その工事進行中であった。この外、米国のコングレス図書館やロンドンの国立中央図書館を初め、バティカン市からオーストラリアに至る五〇の世界的図書館が財団からの援助を受けている。この中に、東京大学や我が日本女子大学の図書館が入っているか如何かは、勿論、不明である。

最後に、財団が創立五十年を迎えて、直面する重大問題と将来への責任について考えるのに、これまでの半世紀に比し、これからの後半世紀には、その問題、その責任は遙かに多種多様であり、多くの点で、もっと緊迫したものだといわねばならない。世界地図を一見すればわかるように、人類の福祉に最善に尽し得るような慈善事業財団が、柔軟性を持つと同時に精選された、今日の生活に応わしいプログラムをつくることは、非常に困難である。第一次大戦後、熱帯病との戦いに立ち上がった頃は、東南アジアやアジア地域で、独立国は僅かにタイ、リベリア、エチオピアであった。ところが、今日、アジアからアフリカを貫いて広がる熱帯地域には、真にごたごたと、新興国が群がっている。その凡ては十分な資本も訓練された人力もなしに、国を開発して行くという、巨大な問題と取り組んでいる。そして西欧の先進国からの援助と奨励を当にしている。そのような援助はUSAや国連、或いはその諸機関を通じて、大規模でなされるとはいえ、海外のプログラムを持つ小数の財団に課された役割は、実に、重要である。相対的に僅かな資力によっても、これらの若い国々が大国の享受している経済的・社会的・創造的恩恵の一部を達成するのを、大いに援助することが出来よう。ディーン・ラスクは彼が財団の会長であった頃、未開発国援助の問題についての評議員会への覚え書の中で、次のような意味のことをいっている。今、問題になっている地域では、全人類の福

祉に影響するような事柄を問題にしている。アメリカの一財団がこのように重要で複雑な問題解決に、大きな役割を演じると考えるのは、厚かましい限りであるが、ロックフェラー財団はその特殊な資産を、その目的遂行の手段として用いて、大切な貢献をすることが出来る。その資産というのは、未開発地域でながく働いた経験のある、財団の役員や事務員のことである。他の機関よりも一層早く、そのような任務を遂行する人々を動員することが出来よう。また、ロックフェラー財団は政治的に無関心であることで信望を得ているし、ある特定の外交政策に対して、単なる道具の役を果たすとは見做されて来なかった。従って、政治的に敏感な地域においても歓迎されて来たし、党派的対抗心や次々に変る政治体制に巻き込まれないで、外国の政府と親密に協力して来た。更に科学や学問と様々な公務の両方に尽せる人材や指導者を養成する経験を積んで来ているのであると。(「人類の福祉を目指して五十年」一八六頁参照のこと)

このように提案された行動のコースに従って、財団は外国機関からの要請に逸早く、且つ柔軟に応じている。また、懇望されれば、数ケ月とか一年、或いはそれ以上にわたり、開発途上にある国々にその必要に応じた専門家を送り、海外の挑戦的任務に振り向けている。多くの有能な人材は大きな個人的犠牲もかまわず、特定の仕事が遂行され、特定の目的が達成されることにのみ、その満足を見出しているといわねばならない。そして、今日では主として、出来上がったというよりは、生まれたばかりの若い大学が、強く、立派に成長するよう援助しているが、それはその大学の影響が出来る限り早く、広く及ぶためである。というのも個々の大学や国でなくして、地域ぐるみ、地域全体を対象としようとの原則から発してのことである。斯くして一九六二年、東南アジア、ラテン・アメリカ、アフリカのために、それぞれ三つの機動部隊がつくられた。医学、自然科学、農業、社会科学、人文科学を組み合せて、各分野から優れた人材が配されている。勿論、未開発地域で政治的経済的組織が成長するには、西欧やアメリカの思想並びに技術に依存するところが多きいという立前から、第二次大戦後、図書館や実験室を一新して、欧州が知的に早く立ち直れるよう、財団は国や大学、個人を援助し続けている。そして五十年後の今日も、それらを直接、間接に援助することによって、人類の福祉に貢献するのが財団の主要目的であるのはいうまでもない。

なお、財団が直面している未来からの挑戦も実に大きく、流動性を持ったものであることを、一言して置こう。フォスディックも既に二〇年前に述べているように、「この財団の資本は投下資本―新しい私企業への投資―として、冒険的に用いらるべきである。」彼がこう書いて以来、一方では、私的慈善団体にとって、今では決断を下すことが容易になったといえる。国内国外の重要目的のため、公的資金が非常に増大されて来たからである。ところが、他方、思想や理想の創始者として、もっと大きな重荷が財団の上に課されているといわばならぬ。その第一の義務は、通り過ぎて来た道に目印をつけて置き、新しい方法を見出し、新しい思想を探求し、冒険的な仕事をし続け、公的資金が直ぐには許されぬような領域で実験することである。創立五十年の声明は、緊急な挑戦の一つについて、このように述べている。

「今日、我が国は黒人・白人の調整をはかるという新しい段階に来ている。私的慈善団体は、そのような調整の過程を断えず助ける責任を持っている、と信ずる。そしてこの財団が果たし得る最善の貢献は、次第にその数を増して行く不利な立場にある市民たちに、より善い教育の機会を与え、その可能性を十分にのばし、社会の中で、当を得た処を彼らに得させるよう、その努力を強化して行くことである」と。少し余談になるが、ジョン・D四世が現に南部で、彼らの生活の真唯中に入り込み、貧困問題のために戦っている事実は、この先代にして、この子孫あるのも宜なるかな、と思わずにはいられない。

過去五十年にわたる十二指腸虫撲滅運動を手始めに、財団はながい奉仕の行路を辿って来たわけであるが、人類の福祉が様々な仕方で著しく改善されたとすれば、人類の生存はひどく複雑化し、人口爆発という新たな要因のために悪化さえしているのである。衛生や健康、栄養に富んだ食糧の生産、音楽や立派な本を味得することを教えて、多くの機会と恩恵が何百万人に与えられたとはいえ、「需要」は「供給」を遙かに上回っているのが実状である。今日、更に幾千幾万人が同じく新たな機会と恩恵を求めているのである。その人々にとって、そうした物質的・精神的利益や報酬は、当然で望ましい事柄だと考えられている。新興国における生活程度の上昇や先輩国が達成した美徳や機会は、慈善的財団にとっても、同様に深い関心事なのである。それは人類福祉の重要部分であるばかりでなく、人類良心の構成要素でもあるから。このように大切なものとして、ロックフェラー財団の今日と明日に強く挑戦せずには置かない。ジョン・D三世は一世紀の後半を始めるに当たって、その精神をこう述べている。「私設財団というさいを投げた私どもは、今までに成し遂げたことをかえりみて、それを誇ることが出来る。しかし前途を考えると、この世は多くの困難な問題で掻き乱されている。それらの諸問題を眼前にして、逡巡することは許されない。寧ろその困難を、人類の福祉を目指して奉仕して来た、今までのどれよりも大きな機会と見做して行きたい。確かに、私どもの援助は非常に強く求められている。掛け金は高いが、未来を展望すると、最善の努力、最大の想像力を挑戦してやまなぬ未来が待っているのである」と。（同上、二〇四頁参照のこと）

以上、ロックフェラー財団五十年にわたるプログラムとその実現過程を跡づけてみた。慈善哲学が如何に真面目に生きて来られたか、どのようにして「与うるは受けるよりも幸いなり」の聖句が、地で行なわれたかを見極めるのが、この小論の眼目であった。読者とともに、その厳粛な意味が少しでも了解出来れば、これ以上の幸いはない。

（註）Toward the Well-Being of Mankind—Fifty Years of the Rockefeller Foundation—